

武江年表

別記

第三百五十七函

和書門	二一九三
類	七三三
號	三三
函	二
架	九
冊	九

和書	二一九三
類	七三三
號	三三
函	九
架	五
冊	四

武藏

共八

庫	文	閣	內
番號	和	21933	
冊數	9	( 1 )	
函號	141	88	

141-88



備編用備



提要

○慶元より日降降の代元世お被り敷下の甚高日不降せり此がふ  
 遊陌僻境の人とてとも千里を遠くせし厥後廉を着願度たを  
 作くとんそ郷向父祖の分母同會ありて後親の葉とて次ふ余り  
 歳事記を編局未定計に再此輯を志し村浮聖壇のあり  
 此編并載る所ハ中人以下の年月不詳とてその中々地理の沿革  
 或は城間の風俗事物乃梅葉ふまるとして獲る不随く遠く素より  
 公認の御事ハ似ひ知るべしあはれたる傳單せる事も採りたれ  
 一のり并編せり

○是の元以來新地を撰りて決度列居の舊部地を阻く可く不播く  
 奇社民屋も地を賜りて新不創一或は禁收の書不置りて處を  
 畧すするの類もておふへりて此編并見算ふ事とて一二を

武江年表

江戸書鋪

青藜閣



58-141

記 撰細の事あり不編せり

○忠臣孝士貞婦烈女の教忠賞を賜りしもの授券不違あり  
姑く新編不脱せり

○新古書客は氣の作其代有必の案後率の年月他の書不貞えらる  
形をりて二三を後す貴人の子に傳りて多し不編一ね近世承決の傳

もまて遺漏ありし一  
九世編不編より九世約法はあ人持志青押本より同種編  
老種軒の藝抄一覽古書氏の思ひの日本の書をかゝりて

○本代の人著り所の新編の書ハ半不評一推り充へく一輛く記一  
片は為れあわしひさまの多あり江戸の事流名所等不ありしもの二三を  
撰りて水編上本の年序をあるは

○此世の風俗を知りんとわくを著る目録を其意集事海客者より一々  
着く物語・塵塚流澤海二話一言我衣織の結環造り青物語城遊笑覧  
隊の系も骨董集等の冊子ありしを新しき案を撰りて記すものこ

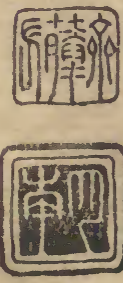
○文化中編輯せる大沼是事類と題せし書本一巻あり  
此書は不詳大凡新編の粹

裁小育りの述を正載す所事一ゆひて完結の物語り久し余之撰  
も又廉編より一々歩百歩の幾りを正し再び書ハ童謡信証乃  
教正載りて此中も信りしを正しきもの要とされと巻帳法極ありん  
事を感ひてあり者けり

○余固より浅見見かておろしは撰めりて正しき正載を考る  
識者の定評を以て精微を正しんせし裁評の事を感つた今世の類あり  
へりし事を頼りて書房の求るふれを草稿の修庸書ハ要割剛不流  
しく和書ハ小書ハ庶幾大方の君子遺腹を補ひ流傳を正しありし事を  
正し新元辰申霜月吉旦

十都神回部人

永正月終事成識



正江年表卷之一

武江年表巻之一

天正十八年庚寅

今年八月一日台<sup>さいが</sup>架<sup>か</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>め<sup>め</sup>て江戸の津<sup>つ</sup>城<sup>じょう</sup>へ<sup>へ</sup>つ<sup>つ</sup>せ<sup>せ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>り<sup>り</sup>その  
 ち<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>邊<sup>へ</sup>津<sup>つ</sup>沼<sup>の</sup>沼<sup>の</sup>入<sup>い</sup>り<sup>り</sup>此<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>地<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>田<sup>で</sup>圃<sup>ぼ</sup>も<sup>も</sup>く<sup>く</sup>る<sup>る</sup>べ<sup>べ</sup>考<sup>こう</sup>ふ  
 ち<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>邊<sup>へ</sup>津<sup>つ</sup>沼<sup>の</sup>沼<sup>の</sup>入<sup>い</sup>り<sup>り</sup>此<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>地<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>田<sup>で</sup>圃<sup>ぼ</sup>も<sup>も</sup>く<sup>く</sup>る<sup>る</sup>べ<sup>べ</sup>考<sup>こう</sup>ふ  
 川<sup>が</sup>の<sup>の</sup>溝<sup>を</sup>堀<sup>り</sup>士<sup>し</sup>民<sup>みん</sup>の<sup>の</sup>所<sup>を</sup>定<sup>ま</sup>め<sup>め</sup>る<sup>る</sup>は<sup>は</sup>ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>万<sup>ま</sup>世<sup>せ</sup>万<sup>ま</sup>易<sup>えき</sup>の<sup>の</sup>大<sup>たい</sup>都<sup>と</sup>令<sup>れい</sup>  
 と<sup>と</sup>の<sup>の</sup>邊<sup>へ</sup>津<sup>つ</sup>沼<sup>の</sup>沼<sup>の</sup>入<sup>い</sup>り<sup>り</sup>此<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>地<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>田<sup>で</sup>圃<sup>ぼ</sup>も<sup>も</sup>く<sup>く</sup>る<sup>る</sup>べ<sup>べ</sup>考<sup>こう</sup>ふ  
 堀<sup>り</sup>を<sup>を</sup>極<sup>く</sup>め<sup>め</sup>恭<sup>こう</sup>平<sup>へい</sup>の<sup>の</sup> 津<sup>つ</sup>慈<sup>じ</sup>澤<sup>ざく</sup>治<sup>ち</sup>なる<sup>の</sup>地<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>田<sup>で</sup>圃<sup>ぼ</sup>も<sup>も</sup>く<sup>く</sup>る<sup>る</sup>べ<sup>べ</sup>考<sup>こう</sup>ふ  
 お<sup>お</sup>ろ<sup>ろ</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>べ<sup>べ</sup>  
 中<sup>ちゆう</sup>古<sup>こ</sup>より<sup>より</sup>八<sup>はち</sup>月<sup>げつ</sup>一<sup>いつ</sup>日<sup>にち</sup>を<sup>を</sup>田<sup>で</sup>の<sup>の</sup>実<sup>み</sup>と<sup>と</sup>号<sup>ごう</sup>して<sup>して</sup>佳<sup>け</sup>節<sup>せつ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>け<sup>け</sup>て<sup>て</sup>今<sup>いま</sup>年<sup>ねん</sup> 津<sup>つ</sup>打<sup>うち</sup>  
 八<sup>はち</sup>月<sup>げつ</sup>一<sup>いつ</sup>日<sup>にち</sup>を<sup>を</sup>田<sup>で</sup>の<sup>の</sup>実<sup>み</sup>と<sup>と</sup>号<sup>ごう</sup>して<sup>して</sup>佳<sup>け</sup>節<sup>せつ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>け<sup>け</sup>て<sup>て</sup>今<sup>いま</sup>年<sup>ねん</sup> 津<sup>つ</sup>打<sup>うち</sup>  
 ○今<sup>いま</sup>年<sup>ねん</sup>七<sup>しち</sup>月<sup>げつ</sup>八<sup>はち</sup>日<sup>にち</sup>に<sup>に</sup>家<sup>け</sup>滅<sup>めつ</sup>亡<sup>つ</sup>小<sup>せう</sup>田<sup>でん</sup>系<sup>けい</sup>居<sup>い</sup>城<sup>じょう</sup>あり○事<sup>こと</sup>跡<sup>あと</sup>合<sup>あ</sup>考<sup>こう</sup>ふ

武江年表巻之一

御入國の後不日新徳の鹽を江戸運送の爲波比より船の通徳を

堀りぬる是今の寺橋の通ありと有り天文より元龜のころは河津のり小田原の年貢を納り波比のには碑も残あり

○八月平河天満宮 御城内梅林坂より 御城の北平河原移さる

○夏海勢の与市より若狭親徳の辺此の頃小湯湯風呂一ツを立ち

風呂儀永紫一旗あり皆人取とてたてし長見守

○四満山廣徳寺今下岩小田原より今年小原が滅亡の後江戸

来り今の昌年徳の沼地を軍庫を営む此の頃徳を希安和尚といひ後

移○天正の頃軍東小乳波風間と有り強盜あり堂を結び陣中

忍び入て盜をたひ徳人おとさる今年より河をへり逃退し

絶つ中東不代記

天正十九年辛卯

正月間

正月冥八洲の徳家兼首の御堂とて御始々登 城ありと云

○十一月軍東徳社小津寄附願の御朱印をぬる○赤坂一ツ本町を

○十二月軍八洲通用のさゆ小判を造りぬる此時代浪一板九合

○小田原の靈風山神徳寺今年移町へ移り後赤坂一ツ本へ移る

文禄元年壬辰

十二月八日改元

御城の西北の地大法書組宛宅地をぬる六組に分ちて一書と

六書まての地名あり尾より書町

○田島山折頼と天正八年小田原より西へ移り下へぬひ今年

本館町の地を寺院をぬる崇長元年又順田町へ移り明徳の災後法書

波比の高農も次原ふは戸へうりまり若原傾城町の軍人志方ふは小原が滅亡

一其の子あり父果て後小田原落去ありと云は年十五方ありと云ふ家来の外抱

友誼を以て廓をひらけり尚え和の件小なるせり又小田原の豪家松田園をたむ  
友嘉明人小入靈香といふ服茶の方を授けり一が如き家たひて後江戸小入  
本町丁目小作といふ彼某と佳傳ふ小入小入  
ありてはる今人化人のありり製せり

文祿二年癸巳 九月四日

天正十八年の後品川一寺地をゆとり一日照山法禪者無山英峯 今年  
道三河屋へ移る天和三年津川 ○輝高先生旅寓の室  
我有 台命を授けり貞観政要を漢文一冊暇四景我有解のふを  
とむ 飛りて東軍の遊遊とむとむ

たうあきもうくやとあをゆりゆむ秋の月の東海の共々  
○天正の頃常陸國江戸湾やりのふふはる徳忌一羽と云兵法の名人  
あり土子泥か岩間小徳根岩菟角と云てぬを授けり母子二人あり  
徳忌病の時菟角の病人を見授けて逐電江戸へ来て微塵流と

名付一派を起して母子あき随へ上見ぬ徳忌の勢ひをふけ一羽と  
二年と云病死してり友人の母子菟角が事を出して孫橋の女  
人の内江戸へゆりて菟角を討べりと後一巻をとりて小徳あきゆり  
う小徳江戸へ頼く泥か岩の困ふ止り麻島の社小菟角相伝を祈る  
小徳江戸ゆりて文祿二年九月十五日日本橋ありて菟角小徳  
より官府より此事を安き刀根岩を預り木刀の仕合をゆり一  
ふ友人木刀を持て立合らる菟角打負てゆり切たり逐電して  
行方を知くゆりて

同三年甲午

九月千坂大橋を始て掛く  
橋板とあるのありては橋板倒しててを壁一板中の人あふ漂ふ作名彦徳時後現小

移りて後院 ○今年米穀豊饒あり

○小田系不老山壽松院今年内地小移させられ今の御治橋の内  
と院をのちる後年神田柳系の辺へ移り又後系へ移る

文禄二年乙未

武蔵小判減 光次と善書以武蔵と  
波河も亦少造をせらる ○小田系當知山奉誓寺江戸小移り  
あひ日は谷桶所町の辺に地をのちる後年喰町の辺へ移り天和二年  
の後今の地へ移る ○芝長見安集云舟町と日市のあひふちひ  
さた橋只一ツあり是ハ渡渡の橋あり文禄二年夏のあひふ橋のり  
あひの残親を塔をせ亦系移るもあひてあり  
官府へさしあつり又さつりけ橋を残親橋といふとあひさの松町  
兼日市町の今の残りの橋のあつりふま一橋あるへ

慶長元年丙申

七月間 土月二十七日改元

一步并小判金始て通用 芝長見 ○六月十二日系師茂内算系法皇大

難又水先降 芝長見  
日五寸 ○同七月朝鮮人乗艘 ○同十二日大地震月と途々

止む ○波河墓を寄る ○多田宗玄といふ人靈告をさかりて京郊

東山の辺より某所像を拵り、奉座ふ安ん今多田の某所あり

○税町常仙寺冥基安某所を安ん

同二年丁酉

○松平為後と駿州より江戸波河墓の下へ移る 坂寛永十八年  
あり今の波河へ移る

同三年戊戌

○八月三縁山増上寺日比谷より今の地へうつる 芝長見  
今この山今の山

谷町の方ありしとどこの辺をひや町といふむく八湖入の地なりて漁人海中不枝竹の竹を垂べ立つる魚の入るをばたて丸くこまをひびといふ字あり今も海苔をとりふじヒキを用ひひびをせきをさけりゆの地居の地あるひひや丁といひ後芝はふらうのききてもひびや町と号しけり後り其口にあつる水町青町赤町五町等町もひび居たりしとて

慶長己年己亥

二月四

二月令別山純室より天神田屋本軍制寛永十二年

其後より寛永のりて別山宗制のり院殿より不違ありて大なると撰ひ十小して一二を徳一の所ありふたり

同又年庚子

小判小光次と異書せしを極平に改めり光次の徳平の名あり

○始て系於小徳目代を置り○池上本門より大塔建立翌年小徳目代を置く

同六年辛丑

十一月四

又月大小分別挺銀の形制を定めり渡河の戸大急銀もけりオノマ

○貞観政要板流孔子家語武經七書板行せしめり浄治世以来の刻本

○安南始て奉書寛永九年まゝ通洛而絶東埔塞始て奉書寛永永

己年の后絶つる安南宋始て奉書寛永十八年迄今年より寛永永

まで二十二年のり済朱平船とて我をく商人亞馬港ノヒスハニ遷讓安

南呂宋木の國く小年毎ふ行て六高賣し然れども私より高小

奉年く不絶とあり以上奉慶報

○十月十六日大地震房総の山を崩し海を埋立と成又海上俄り潮

引きて二十餘町子濁と成り十七日潮大山の如く卷上流死駁し

○十一月二日己の刻渡河町事々恐ろし火をおびて大焼亡不江戸町

一字も跡く人多く死す早亮町中茶草友火事絶は序子皆



板葺ふりつてたり 官府より命せしむるに是の町中とてくく板

葺ふりつてたり 板葺ふりつてたり 官府より命せしむるに是の町中とてくく板

海道表柱とてり 葺かへて葺後半分を六折して葺てり 塔人沙汰

りり本町二丁目の勝山次郎を請ふを半分を六折して葺てり 塔人沙汰

略して大奇特許中人ちうびりて異名を半瓦葺と云是江戸

瓦葺の始あり 以上等と云 戸安集小か

慶長七年壬辰

左泥治へ奉書長十一年と云 某處難 徒小か

○小石川至量山寺煙土清甚提すと成徳通院と号し殿堂汚坊不浄建

立あり繁をあら

同八年癸卯

今年江戸町割を命しり 官又長見と某小日本六十餘所の人等と

よせ神田の山を崩さし 今浪海卷の 東南あり 南の入海に方二十餘町 堰さすを流

を立させあらむ 是より大なる海の辺八代海海卷乃之河原の邊鞠町の邊某町を

村ありありたり町小つら町ハる代田村の内あり大つら町と室田村のうちあり

ふ代田室田ともふ今の村の北の邊あり 江戸横濱造営の時今の地一級ををこれよりあり

村ハ今の横濱の所の辺あり 神本よりあり 赤坂二丁の町をあらりハ天正九年の

なるありハ一或古記ハあるハ二河町ハ江戸法入の初二河町ありハ小川をを

小強右の地を買ひ置きたるあり 是より大なる海の辺八代海海卷乃之河原の邊鞠町の邊某町を

せりハ後小町を改りハ二つと古記をを改りハ二河町と号せると云 横濱町とて

是の所の邊あり 是より大なる海の辺八代海海卷乃之河原の邊鞠町の邊某町を

平川の村ありハ平川よりハ流あり今の江戸川を改りハ平川と云 是より大なる海

版田町下板橋の西よりハ一ツ橋のかう東南の流自浪町池町浪町の方へ流す今の

が葺橋も江戸ありハ平川の流を隔て北の方外田に流す流道場もあらハ今の流道

は平川に流すハ平川に流すハ平川の流を隔て北の方外田に流す流道場もあらハ今の流道

武江年表巻之二

一五

御城地度より一々各代地をめぐりて 御城より一里半後再び御地をめぐりて御城の西  
 うつりしあり妻一丸の御代に古記より一里半をのりて  
 落穂集云町之普徳の儀は只今の日本橋筋より及之河原をり望望をり是れが始  
 りとて更なり居く望望横堀ともいふ味てを揚土をり瑞小山のふく後とていふ  
 法より一里半あり御代に町人大預出しく町屋を削りさき小付傍より次寄小太の揚土を  
 引九地形を築き立寄出を修り表海より先は落堀ありとて一里半をりか堀をつり  
 引後り堀の程を町屋形ひの若もより一里半をり御代に堀一町の内小半ありとて  
 仕し御代より一里半あり後表小をり小堀一町の内小半ありとて仕し御代より一里半あり  
 かんえいとあり云々 幸徳会考小及之河原 清入國の後村本町新とて並てあり  
 後年或大なるありとありて東の御代より一里半ありとあり古町の幸  
 中殿を築き及一里半ありとあり  
 をいとひてありとありとあり

去の昨日本橋をめぐりて掘り見る見込集云大川をせり川津へありとあり  
 石垣を築き一掛けありとあり板の上二十七石ありとあり板にありとあり  
 又云この橋法普徳の時今日日本橋の人ありとあり掘り見る橋ありとあり橋のたきを  
 人ありとあり掘り見る名付は天よりとあり降らん地よりとあり人一人一岡日本  
 橋よりひゆる事希代不思儀とありはせりとあり

○夏の頂 台命ありて九月廿二日愛宕権現社勅清まつりあり は附系  
の儀を

○正月廿二日 藤原頼朝御遷座 は附系  
あり

○正月廿二日 藤原頼朝御遷座 は附系  
あり

慶長九年甲辰 八月日

二月日本橋をめぐりて掘り見る見込集云大川をせり川津へありとあり  
 を築き一掛けありとあり板の上二十七石ありとあり板にありとあり  
 ○永楽橋の代り小廻りありとあり用 たの方若しを載しありとあり  
御ひ冬の風を除き諸人の利益とあり

同十年乙巳

増上門前の老翁若老を感へて和尙小若く聖日伽藍堂構の  
 台命を下しありとあり奉堂回廊等御遷座ありて大伽藍とありとあり

武江年表巻之一

武江年表卷之一  
七

○大城所普濟寺付栞町のり場所用比あり六の辺の遊女屋ともえ焚  
預ち前へらうらうら○然代遠く小道橋ありあり武家藩邸後移多  
○南宮とりのタゴ蓄林を渡り長崎へく播る切なりめてタゴを裁る  
一夜天正中賢人  
お海のもの

同十二年 丙午

大城を築たぬの二月より始り九月末成統あり  
自ら吳橋のおまじく高次  
を免罪めらまじく  
のびとなり高松へ  
を後年へ渡り  
○六十六州行軍を結て植る○本々馬清と三河橋筋後河原とり後  
のふ○十二月八日永樂渡河停止漚とらり用ふへきと旨日本橋へこれ  
○遷置一御書并物とも揚る被出の使りた小末  
以上至産額後あり至産云田原とりの  
國を不詳りしる番丹のあまらうとて  
六年

武十二年  
とらうら

小末氏康の時冥本末永樂渡河を用ふへと令せられびて幾い上りより天下は  
一統となり二強先定て用ふあるまじくも永樂一強のうをり小びに又渡をててきし是れ  
おのて苦難をえらひひ百氏安らうらとて今年永樂を止ぬひ一ゆ小末氏代記ありり  
或記云永樂渡一後又合きおや定ぬ合ふらうらとて時一後小一渡り除きては渡りは合ぬ  
ゆく小永樂の年貢ありは遠風ありびと百積小尾を後  
永樂小一せんの價を除く九十六積をもて通用とらうら

同十二年 丁未 二月

二月十三日より十六日まで 所城のをさく親世金春勅進能真行あり  
同廿日同前ありお雲の神子も國勅進奇舞妓真行あり  
り人の娘とておふらうら  
のま山本ノ骨董葉小一  
○烟系徳州へひまらうらとてを  
養て火を吹をけけりを吸ひを後ひきせるを和ひて後小紙せひきせるの製をよみ  
羽ひ或ハ作のうを用小又文をきりのを中取ありをく遊りせるあまらうら  
○迎濱園白伝平公所中向ありは時梅差をよ小母とて及びひ歌をあら  
おふらうらとておふらうらとて

東の角田の舟の由乃江戸の舟とひるの角田の舟

○閏七月朝鮮使初来聘 正使長祐吉副使 慶選平丁好寛 ○八月八日客星現

慶長十二年戊申

林道春先生所傳若小命をうける世時と先生後をま

同十三年 己酉

二月に日月の容方より多現 皇幸代男小方形 月出満没如器

○二月島津度琉球を征して仲山王尚寧を將ひ来

○八月阿茶院始々入貢奉書 唐船始々来

○湘草所創集 一説元和元 年より ○秋品川海舟船為山陰より海船より二十

万所乃透幅を産けり 色澤還自中をさす

同十六年庚戌 二月閏

其愛宕権現本社 まゐりて見せきん 日福もこの時建立と元和二年の丙辰 紀河小治らるるの初ありと申す

○銀町ふ知足院所建立 後持院の 同名あり

○七月十九日勅して坊上寺十二世貞蓮社源卷上人一普光親智法師の

号をあらふ ○八月琉球始々發府并江戸 所城一入貢王尚寧奉書

○官醫吉田宗拘奉 其子宗達又良医の汝らんあり大橋宗桂 も宗拘の男あり其茶園式一巻を著り

同十六年 辛亥

正月二日竜口蒲生度海落火火口門尔仙人罹漢の形物ありて災原

ありしう世時焼くると ○琉球聘使来 ○京に外耶蘇宗再發

○龍徳山雲光院所築局建立 了治町の 燈あり ○六月廿二日加孫肥後と法正奉

○官醫の養安院正御奉 日十七日女官翁と号山嶽女の人あり曲直淑乃この門人あり 一々師の姓を冒し其長十年江戸に居て官医あり あり後傳を嫡子山小瀬て別在小瀬居也

慶長十七年壬子 十月四

亞馬港即亞あまうらよりあり奉書まへ久和七年と新評西把弥亞始いらいすそみやく奉書其のちあり〇七月廿二日大敷降おおのけさか〇大寺造を傍系同於誅せしむ宮城を始す 辻切をよび

同十八年 癸丑

漢又刺亞始くんけんらやく奉書〇六月七日神田社北と有南傳了町始く清藤あり〇九月千葉家後統国分を傍心務まごころとり人先祖古傳乃捺相を牛御前へ寄進せし〇十二月耶蘇宗の老淺系やそそうみ於て誅せしむ

〇徳望内崎甚内同取小誅せしむ徳望を始す 今も甚内橋より八月十二日を今もまつりと

同十九年 甲寅

那波道圓ななみちまゐ 浪路夷倭寓なみのりやいあき 又小隨またつつゝ始ていふくり此の書あり廿九日の所把州 後の指きより把州へり

〇八月廿八日東刻大風増上寺山門あまの始て人一家損を和川九品より重の塔倒あまのつゝ安二丙寅年滅絶せし取ふり

百六十九年を經く滅せしむい〇八月廿八日東刻大風増上寺山門始て人一家損を和川九品より重の塔倒つゝ安二丙寅年滅絶せし取ふり

〇九月南蠻人阿茶院人來朝あんなんじんあちやいん 此の時ありヤンヤウスこの時ありヤンヤウスのあり地取マヨス

〇十月考長貝文集けんちやうけんべん 編者之浦澤心編者之浦澤心のあり地取マヨス

考長貝文集の考記ありりうわあ家次代けんちやうけんべんの事けんちやうけんべんを抄録せしをゆ家次代記と題して刊行し傳の抄録を考長貝文集と題しこの考長貝文集を抄録して序記せしを考長貝文集と題し

正徳九年表卷之一



ありあらねどもあまきり限らふありけり○申すの富士そこの山の上 約は

らりしてすまじ 莊嚴をなす六月一日大市立り警備をなす

以上を長岡公の事とすあつたはあつた 申す

○この頃傾城を定りしり廓くわくありてふ敷立に麹町八丁目十六七

町系六番より来る鎌倉河原五十は新設河原筋町より来る大橋の

内柵町ふせ 新設慶長十年ふ元誓願寺前へ引取大橋の今の常盤

橋より柵町しほ 今の道三河原のりなりと云せう 醒世氣の奇海考あま 前

段を築き後ふと足普通の段を築き事合考今の系橋具足町の

東華沼の汐入を築き傾城町と云あつた 地丸丸く一方は

南の所例をすし町水の所例を柵町と云あつた 中一筋の事と云あつた 町の町と

云つくと云く六の流と云れは其の頃傾城町の系橋の柵町と云今

於柵町と云み町ありと云くたのちりりあつた 柵風しほ ありと云く

その時世風ふろ 俗風や 俗女あ ありと云く見よ 集小天正の頃の流俗の事を云て後ふ

の頃あつた流俗の事あつた 俗女あ ありと云くあつた 俗女あ ありと云く

あつた俗女あ ありと云くあつた 俗女あ ありと云くあつた 俗女あ ありと云く

あつた俗女あ ありと云くあつた 俗女あ ありと云くあつた 俗女あ ありと云く

あつた俗女あ ありと云くあつた 俗女あ ありと云くあつた 俗女あ ありと云く

あつた俗女あ ありと云くあつた 俗女あ ありと云くあつた 俗女あ ありと云く

あつた俗女あ ありと云くあつた 俗女あ ありと云くあつた 俗女あ ありと云く

あつた俗女あ ありと云くあつた 俗女あ ありと云くあつた 俗女あ ありと云く

あつた俗女あ ありと云くあつた 俗女あ ありと云くあつた 俗女あ ありと云く





白く掃き  
この刀を拵又槍をのり女らよき人こかんるが髪毛をうすたて  
りけ髪を衣のゆふら返すよふあうりぎ  
常の女の元髪を眉の上におある髪おかく髪さぬおあうり髪たがひ  
あき及ぬおおて襟の境おあり首飾の形おとてあ  
の衣拵おさぬおあれと  
細く色く  
練緯 今言髪  
牙同 又襟も有べ  
撥き又の色く  
又女の髪六布女道のゆふらうり布を二布合て纏るるを後のこふ  
尻下まへりあうり又お杖を並置の下敷のたねお痛のうりまへ  
さげうりもあうり帽をうりうりもあうり又男の肩衣拵おひび

あく小社のゆくき合て総敷のゆく横筋を添うり昔は武士の文と  
総髪のお老人おどおの髪下り女一夫和貞享の以まてもあうり有て  
そ後も健く見ゆ又髪せはあうりもあうり

元和元年乙卯

六月四 七月十三日改元

古田原稻荷社建立 おろひら

○六月十二日古田織部正奉 一役六年  
庚申と云

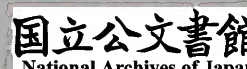
○六月十八日山生所お終わ  
練物始まる所城内へ  
大はる町を敷け  
新のあまけに既お

○小石川白山権現社勧請  
春高地へ今も所殿海の内あり  
そと後

兼およぶり今の地へ移る

同二年丙辰

新田明神社新田権現より湯島へ移る  
○藤吉明神社新田権現より今の





元和四年戊午

二月

二月庚申今の徳島府界の 清江津遷すあり迎あり ○日本橋清江真

○清江の辺より多火探田連焼爰 ○十月家の刻長雲公 慧果公

○同白石勅堂清再建十一面觀世音を安んずる事 山形公等

中真窟山秀  
あらしむ等修心あり

同又 辛巳未

夏より冬よりありて毎夜白氣を南より北の角の如く長數十丈又  
慧果公等ありて火と云ふなり

○又月より八月まで大旱又穀也人なる多し死人

○大坂清江書指 ○長江川を安んずるの爲久保八幡又境内あり  
時の鐘を刻後 延宝中甚く切通し福あり ○九月十二日得富先等

九十九大川人林逢春とせりも又たりの名波及田舎に云  
麦不得菴松氷留に之宅寄 齊ありの世小あり

同六年庚申

十二月

後妻山普門院陽田川の辺より龜戸村に移る ○二月十日後代

光亨九十二 ○十一月二日増中真親智七十七團作入寂七十七

○清江清江始りて建 ○日本橋を築せしむ其  
其除の爲小築せしむ  
なり日本六十路表の法度

同七年辛酉

二月親世等一代其具行を揚新東洋

○九月廿二日小堀遠洲等上京殺良等所友等の旗とて津家  
川の舟より酒賣茶等と送きて送り

為り等んと等ち等れ等る等も等わ等る等人等心等こ等わ等る等也等

○十二月十二日織田有樂兵衛年

七十才恒居の町をえ敷新屋町と云  
今あり有樂恒居あり一あり

元和八年壬戌

活所遺稿

壬戌元日遇雪

雪隨世事正紛々 閑座牕間東武春

諸葛青蓮開隻眼

笑而不答當時人

○十一月源通村に冨山山下向方の活紀行を冥在海道記とあり

十一月十六日

源通村

源通村に冨山山下向方の活紀行を冥在海道記とあり

源通村に冨山山下向方の活紀行を冥在海道記とあり

同九年癸亥 八月岡

正月明の夜遠澤郡統邑徐動溪をよる小親をよるの二字を書くと

歌を掲る ○正月又日智雲白道情隨意上人寂

七十才と人女世の情を  
の弄りあり後人あり

○芝場とて山門浄再建

○十一月十六日幕所奉因坊日海寂

世年閏記事

女奇者妓を極せしれ男奇者妓もあつ

○年所一月より葛西まで船道一々一二三に又の船を掛

寛永元年甲子 二月晦日改元

停勢浮羅宮より長官おに布双太神をいり日平橋通三行目

○長徳法中靈叟を感一永代高小八情官を勅法と回公年再

奥あり○目黒村正初堂法再建○浮西把孫重後系

○東叡山實永水所建皇園山慈願大所あり 幸海合考ふは地は後堂皇願の地を考附あり一西ありて

皇神の地は後堂の所あり一後五段をさくくと所を考ふ一を思ふくと所中のみ留へり一水くまの地の名とあり一とあり小波瀬神社の今の古所院の辺あり一とほつ今の地は福さう又比叡山坂中の名をさう一入道村の町を坂中町と名は

○道本山靈巖寺宗創 はつひん云々皇巖山の地は推考皇巖寺と入地を以ては地邊を平治く建之あり一とあり

○明名志が助寄右撰と号 はつひん云々皇巖山の地は推考皇巖寺と入地を以ては地邊を平治く建之あり一とあり

○二月十五日より中橋より中村動之助奇為娘と号 はつひん云々皇巖山の地は推考皇巖寺と入地を以ては地邊を平治く建之あり一とあり

○十月十五日小柄系結持現社改の離系終りの二字現は之より はつひん云々皇巖山の地は推考皇巖寺と入地を以ては地邊を平治く建之あり一とあり

はつひん云々皇巖山の地は推考皇巖寺と入地を以ては地邊を平治く建之あり一とあり

○十二月朝鮮人來聘 正使通政右文鄭玄副使通判姜晏弘會鴻臚寺辛福榮

寛永二年乙丑

湯島小幡祥院創 毎の若妙川渭川劉和尚この所は教慈四天沢と云寛永十一年天沢山禪祥院と改む春日の居は善境あり居は寛永廿一年癸卯九月十日日遊をあり後二位

禪祥院に圍り居大姉と号す

○南八丁堀二丁目より一丁目移住 是を二丁目と町を建

○八月諸社二増大の 是を二丁目と町を建

○二月より八月と決必早殿 ○二重津城法在書始

同日乙丑 丙寅 己卯

○天満文鎮 寛永二年より今の所は後一を社に

○二月より八月と決必早殿 ○二重津城法在書始

○耶養宗再獲 ○九月上野小

神祖御宮所建立 友軍宗より法建をとりて或は白木敷山の  
隈より因於所と申すなり今も此處あり

○十月吉原又町のあり 今吉原町と申すなり

○武蔵志料 武蔵志料は徳川御秘蔵を引て寛永二年十一月十日鳥丸大納言  
の御書あり

○武蔵志料 武蔵志料は徳川御秘蔵を引て寛永二年十一月十日鳥丸大納言  
の御書あり

○武蔵志料 武蔵志料は徳川御秘蔵を引て寛永二年十一月十日鳥丸大納言  
の御書あり

○武蔵志料 武蔵志料は徳川御秘蔵を引て寛永二年十一月十日鳥丸大納言  
の御書あり

○武蔵志料 武蔵志料は徳川御秘蔵を引て寛永二年十一月十日鳥丸大納言  
の御書あり

○武蔵志料 武蔵志料は徳川御秘蔵を引て寛永二年十一月十日鳥丸大納言  
の御書あり

○武蔵志料 武蔵志料は徳川御秘蔵を引て寛永二年十一月十日鳥丸大納言  
の御書あり

社代ふあり

寛永二年 丁卯

二月源通村に御下向あり 所澤藩山真雲寺  
諸岳和尚より

○東叡山に生門常 東叡山に生門常は法苑寺ニツキ  
短冊を安置塔を所建立  
は所建立  
中法塔

○八月八日 八月八日は愛宕山権現社火  
は遠堂者

○大地震 ○十一月塔伽沙古来 大地震は  
理加ト云  
新羅より琉球へ渡り  
一萬丸  
すんき

○同又年戊辰

○同又年戊辰

○同又年戊辰

○同又年戊辰

○同又年戊辰



江戸民の相争

江戸味酒を二まのりすりて一まのりのみをまのりのつる月

○今年より我家うこけ書を定る場より於ては斬あり一板を

寛永七年 庚午

正月八日隅田川

古塚の志う一社柳をあらわすことせむ首一を断

○二月十日日醫師甲斐進奉率 百十七ヤウウのまをて後り一や作

○二月小溪後生寺あり一布引祖師

像身込事由さへうり

○六月琉球人來碇

○同廿二日大地震

○魚籃親世老之田の地安直

○十二月廿三日大地震

同八年 辛未 十月閏

二月十九日江戸中不所降

○二月二日浅草寺の上

○八月大風

○十月十七日野大

同九年 壬申

諸家深秘録云今年より奥只仙臺の米穀始る江戸也



○中村劫之舟を居申揚り称宣町移今の入形町あり

○若盧新修云 寛明日記寛永九年の件を其喰つる子孫に

其留せよとの旨初より二十日の内申と見えたり

○玉室澤宮二所漏處より召還しあひ七月廿七日に廣より

井田の度徳を不實に去の冬澤宮の跡込氏子寄居を翌年

二所を大種に歸せしめり以る澤宮寛永十三年麻布小宮澤あり  
以る石居を福く檢束庵とりし

寛永十年 癸酉

上拜若くは林送春先生別荘を先重徳を建尾島公治建之に正徳  
振うりて云はれり

○正月廿一日廿二日就國大地震小田原の

別きり路一同廿六日申刻大地震

○武州赤の地津番帳とありし今平松平重州族にありし地蔵の

面く江戸一帯宅地をぬりし一帯を赤系赤忠町とよぶ

○正月より六月まで流あり○南流す町と目の中川を掘り町屋を  
未詳

○都内其居居ありて真行未詳

同十一年 甲戌 七月間

正月十八日揚上より學上人念佛之昧中へ隠終りある案具の後

身骨寒く舍利とあり○二月二日 津城子母の津能芝居町  
津能をゆりて青羽を揚りて是より始りけり

見えたり○二月九日お基作大橋宮の権率 八十七

○二月十日朝白雲月を貫く○王子権現社 其神明文

為久保八幡文 目黒區勅堂考津造堂あり好是もは并  
建たり

○品川ぬき本堂に定儀二王門は并建

○平塚明社社神建立秋奈至之儀能行  
 ○去年より山生活を於禮納り大なる獲と候  
 ○室林山善宮より龍町代地とて弓谷へ往  
 ○七月琉球人來聘 正徳法敷子令書とあり 村山又之席世之居暮麻町より  
 龍の娘を真引 市村羽左衛門 ○八月八日或る妻の居居の室 おきのち 出  
 齒をちぢみぬひ終ふ今日終ぬり おきのち 龍終ふ送らぬありむ おきのち 心を  
 為る老家を新く おきのち と相ひぬ おきのち  
 ○明人安針 後池の 江戸日年稽安針町をぬそり又在州三浦逸見村を  
 願と其妻妙満尼今幸七月十六日終逸見村浄土とて墳墓あり  
 安針ら忌日 おきのち 禊 おきのち 禊 おきのち 禊 おきのち 禊 おきのち 禊 おきのち 禊 おきのち 禊

寛永十二年乙亥

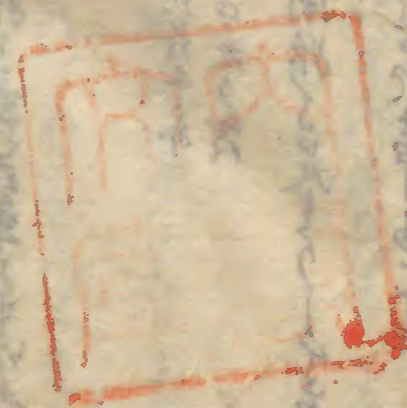
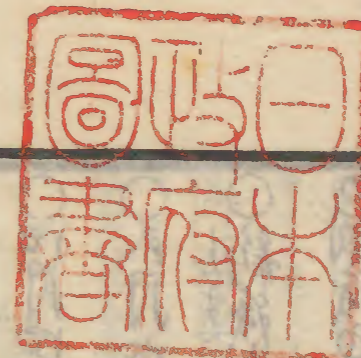
正月廿五日寅外刻大地震平本刻又地震あり ○後府出立儀始  
 ○春鳥丸大納之亮座々堂東に下向ありは乃の記を春の曙中り  
は乃世に於ては下向ありとて 又源通村に下向あり  
 春あぬ木の葉もうらむとて時きまへうらむ木の葉なり  
 ○安宅丸の舟船修置より来り 一後不寛永十一年とも云 柳川町の辺に置あり  
之時より止る又向あつとて天和 ○二月天台院に在る年浄念寺後河原  
二年より北辰を解ひたる人 津草へ移る ○四月朝鮮人來聘 和田倉山門の内を切  
して韓人曲をなす  
 ○六月十二日大風遠呂豆舟渡海の船八百艘被損す  
 ○七月天毒 くく 焼 ○ころ痛如集る年割五知如集を安直に 小  
但唱上 ○八月菊切町茶席如安直に  
人置基 ○八月廿日特時山樂光初年 七十七 ○塙所天下一り藤麻をち



洋ありの事持あり

○十二月朝鮮人來聘

正俊白藤任統副俊東濱令世涼  
從幸青丘茨床 張跋本持古之



武江年表卷之一 畢

